

令和4年度
奈良県立大学附属高等学校
入学者一般選抜検査問題

国語

注意事項

- 1 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 答えは全て解答用紙のマーク欄にマークしてください。マークは解答用紙の例に従って正しく記入してください。複数を解答する場合も、一つの行には一つだけマークしてください。
((四) など)
例：(四)で選択肢ア～オから、解答としてアとイの2つを選ぶ場合、次のいずれかのようにマークする。

(四)	<input checked="" type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ
	<input type="checkbox"/> ア <input checked="" type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ

または、

(四)	<input type="checkbox"/> ア <input checked="" type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ
	<input checked="" type="checkbox"/> イ <input type="checkbox"/> ウ <input type="checkbox"/> エ <input type="checkbox"/> オ

- 3 印刷ミスなどがあれば、静かに手を挙げて監督の先生に知らせてください。
問題内容についての質問には答えられません。
- 4 不正行為は絶対にしないようにしてください。

次の文章を読み、各問いに答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を表示している。

5 言葉が鍛えられるのは、言葉が有効に相手に届き、相手が気持ちよくその言葉に反応する場所ではありません。たとえば、友人同士の無防備な会話や、政治党派や、宗教団体や、運動倶楽部といった、※綱領や目的を同じくする仲間うちでの会話において、言葉はほとんど空気のようなものであり、言葉の無力さを意識するなどということはめったにありません。そこでは言葉はただの道具に過ぎません。

10 言葉が鍛えられるのは、ほとんどの場合、言葉が通じない場所においてなのです。「鍛えられる」とは、やや奇妙な言い方ですが、言葉というものが、単なる情報交換の道具であることを超えて、複雑な色合いや、①含みを持って輝き出すことがあるということです。そのとき、ひとは初めて、言葉というものが案外複雑なものであり、一筋縄ではいかない厄介なものであることに気がきます。言葉が何かを明らかにするよりは、何かを隠蔽することもあるのです。いや、こちらの方が、言葉の本来の役割であるかのように感じるときもあります。

15 そういう言葉の不思議さについて思いをめぐらし、挫折を繰り返しながら、言葉に生命が吹き込まれるということがあると、わたしは思いません。

20 自分の発している言葉というものが、本当に自分が相手に伝えたいことなのか、それともただ、自分の中から湧出してくる感情の吐露でしかないのか。

相手の応答の言葉は真意を運んでいるのか、それとも相手は何かを隠すために、言葉を用いているのか。

普通は、そんなことは考えません。

ある年齢に達すれば、言葉というものの可能性も限界もわかってくる

25 ものです。

しかし、経験も知識も不十分な青年期においては、自分が自由に使えるものは言葉しかありません。言葉にすがりつき、それゆえに言葉に裏切られるという体験の繰り返し、青年期というものの特徴です。

30 そして、この言葉に裏切られる経験は、言葉は信ずるに足りないという傲慢となり、ときに沈黙し、ときに必要以上に饒舌※になったりするわけです。

二十歳そこそこの青二才であつたわたしも、無知と傲慢によつて言葉を軽蔑していました。

35 もう少し厳密に考える必要がありそうだったので、言語学の本も何冊か読んでみました。それで、何かがわかった気になったけれど、本当は何もわかっていませんでした。あたりまえですよね。言語学を学ぶということ、実際のコミュニケーションの場で起きる問題について考えるということは、ほとんど関係のないことですから。

40 そんなわけで、言葉についてどれほど勉強しても、実際のコミュニケーションの場においては、いつも何か大きなガラス板のようなものが間に立ちふさがっていて、自分の言葉が相手に届かないという思いは消えることはありませんでした。

45 この他者との間に挟まっているガラス板は、まるで偏光ガラスのように、わたしの言葉を捻じ曲げて相手に伝え、相手の言葉もまたその意味を歪ゆがませてわたしの心に届けられてくるという思いが去らなかつたのです。

少し前に、わたしが父親の介護に関する本を出版したときに、作家の関川夏央せきかわなつおさんが書評を書いてくれました。そのなかに、はっと胸を突く言葉がありました。

50 「義務は愛よりも信ずるに足る」

「大事より些事※が大事」

関川さんが言わんとすることを、わたしはソク座^⑥に了解しました。

わたしの了解は、関川さんの書評のロジック[※]についての理解というよりは、かれの「言葉に対する悟達」についての了解であったと思います。悟達？

それをうまく説明するのは難しいのですが、わたしはかれの言葉から、「言葉について、躓^{つまず}いたり、傷ついたりした経験を持つ人間だけが到達する場所」について教えてもらった気持ちになったのです。

子どもが父親の介護をするということは、そこに愛があるからではありません。親が子の面倒を見るのは、まさにそこに愛があるからであり、法律にも書いてある義務です。しかし、通常、子が親の介護をすることは義務だとは思われなくてもいいかもしれません。法律で規定されているわけでもありません。しかし、法律には書かれてはいなくとも、倫理的な「義務」なのです。

65 親を介護する子どもは、義務感からしぶしぶ介護に向かうというのが、実際のところでしょう。本音を言えば、なるべくこんな面倒な、労力と時間のかかることはやりたくはありません。避けられるなら避けて通りたいと、誰もが思うのではないのでしょうか。

実際のところ、わたしが父親の介護に就いたのは愛というよりは、義務感からでした。

わたしは、当時、孝行息子だね、お父さん、喜んでいようと、近隣の方たちから褒められた。しかし、そのことでわたしの苦労が報われるという感じはしませんでした。

しかし、関川さんの「義務は愛よりも信ずるに足る」という言葉を聞いて、二年間の介護生活が報われた気がしたのです。

わたしが父親のためにしていたことは、わたしの中に生きていた小さな義務感からでした。それは、わたしが引き受けなければならぬ何かでした。誰かが、これはお前の義務だと命じたわけではありません。ど

こかの法律に書かれているわけでもないので。それでも、それは義務としかいいいようなないものであり、どこか遠い過去からわたしの身体の中に入り込み、棲み^す続けてきたものなのです。

わたしは、その小さな義務を行使しただけです。権利ではなく、義務の行使。

そこには、言葉はほとんど入り込む余地がありません。あるのは義務という名の返礼です。それは、遠い日に受け取った贈与に対する、返礼だったのかもしれませんが。つまり、極めて個人的なものであると同時に、ひとびとによって繰り返され、受け継がれてきた人類史的な「贈与と返礼」の現代的な儀礼のようなものだということです。

人間の社会の深層には、このような義務が埋め込まれている。90 普段はそんなことは考えもしませんが、介護という厳しい状況の中で、わたしは、そんなことを考えざるを得なかったのです。

介護の後半、わたしと父親の間にはほとんど会話というものがありませんでした。父親は老いと共に、言葉が少なくなっていました。それでも、わたしと父親との間には、かれが元気だった頃以上に通じ合うものがありませんでした。いや、実際にはほとんど意思疎通はできなかったのですが、少なくともわたしは、父親が発する小さな信号を聞き^⑦ノカすまいとしていたように思います。

妻とも、この頃はほとんど言い争うということがなくなりました。お互いに還暦を過ぎて圭角^{※けいかく}が取れたのかもしれない。いや、それ以上にお互いが少しずつ愛から遠ざかり、義務を果たそうとするようになったのだからと思います。

実際のところ、相手の言葉のなかから、それで、本当は何が言いたいのかと、相手の声に聞き耳を立てるようになっていたのです。

105 言葉の内容よりも、ヴォイスを聴くようになったということです。言葉には、それが指し示す意味とはいっても少しずれたところに本當に伝えたい事柄が隠れているものです。

以前、わたしは自分の会社でひとりの物静かなアメリカ人を雇った
110 ことがありました。名前をポール・タッカーといいます。ポールは、母
国で離婚をして、生活を変えるために日本にやってきたのだという。履
歴書を見て、わたしはかれが大変優れたプログラマーであり、博士号を
持つ男であることを知りました。

実際、一緒に仕事してみると、ほとんど天才といえるほどの才能の
持ち主だったのです。

115 わたしはポールと意気投合し、よくオフィスの近くの呑み屋で酒を酌
み交わしました。ポールは、慣れない日本語を交ぜながら、英語でわた
しに話しかけてきました。わたしは、ブロークンな英語でかれに応答し
ました。

わたしたちの会話は、ほとんど小学生レベルだったに違いありません。
ただ、ひとつだけ違うことがありました。

120 わたしたちは、もっと深いところでお互いの考え方を交換したいとい
う思いを常に抱いていました。

わたしは、ポールがわたしに伝えたいのに、うまく伝えられないこと
があるのを知っており、ポールも、わたしには、かれに伝えたいのに、
うまく伝えられないことがあるのを知っていたということです。

125 ⑥ このとき、わたしは、言葉というものの逆説的な効果というものを学
んでいたのだと思います。

言葉がうまく通じないその分だけ、思いは通じるといふこともあるの
です。

(平川克美『言葉が鍛えられる場所』より。出題の都合により一部文章
を省略した箇所がある。)

(注) 綱領Ⅱ団体の主張や方針などを示したもの 饒舌Ⅱやたらにしゃべること

偏光ガラスⅡ全方向に均等に広がる光のうち、ある特定の方向にかたよって

広がる光だけを通すようにしたガラス 些事Ⅱ小さなこと

ロジックⅡ論理の進め方 主角が取れたⅡ人格が円満になった
ブロークンⅡ外国語の発音や文法などがでたらめなさま

(一) 文章中の a・b・c のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、それぞれのア～エから一つずつ選び、その記号をマークせよ。

① a キ妙

ア 医学の発展にキ与する。 イ 好キ心が人一倍強い。

ウ 新たな問題を提キする。 エ 神社で合格をキ願する。

b ソク座

ア ソク位の礼を執り行う。 イ 迅ソクな対応が必要だ。

ウ 事態が収ソクに向かう。 エ 全国での販売をソク進する。

c ノガす

ア 大型の台風がメイ走する。 イ 貴重な資料が散イツする。

ウ 社長は三月にタイ任する。 エ 犯人はトウ走して行方不明だ。

(二) ① 一筋縄ではいかない の意味として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 自分ひとりの力で解決できる問題とはいえない。

イ ありきたりの考え方や対処方法では解決できない。

ウ いざというときの頼りや助けにはなってくれない。

エ 短時間でその扱い方を習得することはできない。

(三) ② 言葉に裏切られる経験 とは、どのようなことを指しているか。説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 言葉の信頼性を高めようとして言語学を学んでも、実際のコミュニケーションの場面で生かせる言葉は少しも身につかないこと。

イ 言葉は情報を伝えたり感情を表現したりするものだと思っていたのに、実は何かを隠すために用いられるときもあると知ること。

ウ 自分が自由に使えるものは言葉しかないのに、言葉では自分の思いを届けられないこともあるのだと幾度も思い知らされること。

エ 経験も知識も不十分のまま、言葉を過剰に使うことによって、かえって自分の言葉が相手に届いたかどうかわからなくなること。

(四) ③ 一行目から46行目の文章に見られる表現上の特徴の説明として適切なものを、次のア～エから二つ選び、その記号をマークせよ。

ア 言葉をめぐる独特の思いや若い頃の体験を、印象的な比喻表現を用いて述べている。

イ 言葉の使い方についての主張を、できるだけ主観を交えず、論理的に述べている。

ウ 言葉についての経験を起こった順に並べ、考えが変化してきた跡をたどっている。

エ 畳みかけるような問いかけや話しかけを挿入して文章にリズム感を生み出している。

オ 身近な具体例を挙げて説明することで、読み手の興味をそらさない工夫をしている。

(五) ③ 二年間の介護生活が報われた気がしたと筆者が感じた理由を次の文のようにまとめたとき、A・Bにあてはまる語として最も適切なものを、後のア～オからそれぞれ一つずつ選び、その記号をマークせよ。

◎「わたし」が介護をしたのは、Aによってではなく、Bによるものであることを関川さんが理解し、肯定してくれたと感じて心が満たされたから。

- ア 法律の規定 イ 社会の常識 ウ 義務感
エ 道徳心 オ 父親への愛情

(六) ④ 「贈与と返礼」の現代的な儀礼のようなものだと、どのようなかとか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

- ア 子の養育は親の義務であると法律に明記されている現代社会においては、子による親の介護の義務も明文化されるべきだということ。
イ 親による養育に対する返礼として介護をすることは、個人的な問題ではなく、人類が受け継いできた歴史的な事実であるということ。
ウ 親の介護とは古代から受け継がれてきた儀礼であるから、たとえ避けたいと思っても、人類の義務として受け入れるべきだということ。
エ 今日介護は、親から贈られた愛情に対する返礼という素朴な義務感から生じた当たり前の行為として広く行われているということ。

(七) ⑤ 言葉の内容よりも、ヴォイスを聴くようになったと筆者が言うときの「ヴォイス」にあてはまらないものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

- ア 多くの人が了解しているその言葉の意味
イ 相手が自分に本当に伝えたいこと
ウ 父親が発する小さな信号
エ 伝えたいのに、うまく伝えられないこと

(八) ⑥ このとき、わたしは、言葉というものの逆説的な効果というものを学んでいたのだとあるが、「学んでいた」という表現から筆者のどのような思いが読み取れるか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

- ア たとえ言葉が通じなくても思いは通じると言われるが、意思の疎通にはやはり言葉が欠かせないので、少しでも多くの言葉を習得しようと努力したことを懐かしむ思いが込められている。
イ 言葉がうまく通じないせいで、かえって相手をより深く理解したいという思いが通じたという不思議な体験から、言葉をもって伝えることの奥深さを知ったという思いが込められている。
ウ 複雑な思いを何とか相手にうまく伝えるために、たとえ小学生レベルの単語や表現方法しか知らなくても、苦心や工夫を重ねて意思疎通を図ってきたことを誇る思いが込められている。
エ いくら言葉が通じなくても思いが相手に伝わったかどうかはやはり言葉で確かめるしかないなので、言葉の可能性には限界があることを早く知るべきだといさめる思いが込められている。

次の文章を読み、各問いに答えよ。

大半の方がそうだと思うが、私たちは五年前や一〇年前の一年の過ぎ方がどうだったかなどと思い出すことすらできない。過去は恐ろしいほどにボンヤリしたものでしかないのである。

仮に「五年前にはこんなことがあり、一〇年前にはあんなことがあったなあ」と思い出すことはできても、それは日記なり写真なり記念品があるから、それを手がかりに過去の順番をかううじて跡づけられるのであって、感覚としては、一〇年前のことが五年前のことよりも、より遠い昔のことだという実感を持つことはできない。

逆に五年前のことが一〇年前よりも新鮮な記憶としてあるという実感も実はない。人は年齢を重ねるごとに時間経過の順に物事を記憶しているのではなく、実は過去をおぼろげながらにしか想起できはしないのだ。ここに記憶というものの正体がある。人間の記憶とは、脳のどこかにビデオテープのようなものが古い順に並んでいるのではなく、「想起した瞬間に作り出されている何ものか」なのである。

つまり過去とは現在のことであり、懐かしいものがあるとするば、それは過去が懐かしいのではなく、今、懐かしいという状態にあるにすぎない。

※ビビッドなものがあるとすれば、それは過去がビビッドなのではなく、たった今、ビビッドな感覚の中にいるということである。

② 私たちが鮮烈に覚えている若い頃の記憶とは、何度も想起したことがある記憶のことである。あなたが何度もそれを思い出し、その都度いとおしみ、同時に改変してきた何かのことなのである。

※ではいったい記憶とは何だろうか。細胞の中身は、絶え間のない回転にさらされているわけだから、そこに記憶を物質的に保持しておくことは不可能である。それはこれまで見てきたとおりだ。ならば記憶はどこにあるのか。

それはおそらく細胞の外側にある。正確に言えば、細胞と細胞とのあいだに。神経の細胞（ニューロン）はシナプスという[※]連繋を作って互いに結合している。結合して神経回路を作っている。

神経回路は、経験、条件づけ、学習、その他さまざまな刺激と応答の結果として形成される。回路のどこかに刺激が入ってくると、その回路に電気的・化学的な信号が伝わる。信号が繰り返し、回路を流れると、回路はその都度強化される。

③ 神経回路は、いわばクリスマスに飾りつけされたイルミネーションのようなものだ。電気が通ると順番に明かりがともり、それはある星座を形作る。オリオン座、いて座、こぐま座。

あるとき、回路のどこかに刺激が入力される。それは懐かしい匂いかもしれない。あるいはメロデイかもしれない。小さなガラスの破片のようなものかもしれない。刺激はその回路を[※]活動電位の波となって伝わり、順番に神経細胞に明かりをとます。

ずっと忘れていたにもかかわらず、回路の形はかつて作られたときと同じ星座となつてほの暗い脳内に青白い光をほんの一瞬、発する。

たとえ、個々の神経細胞の中身のタンパク質分子が、合成と分解を受けてすっかり入れ替わっても、細胞と細胞とが形作る回路の形は保持される。

いや、その形すら長い年月のうちには少しずつ変容するかもしれない。しかし、おおよその星座の形はそのまま残る。

さて、記憶分子は確かに実在していない。しかし、分子の代謝回転と記憶のあいだには奇妙な関係があるように思える。それは時間経過の感覚のことである。

一日が瞬く間に終わる。あるいは一年があつという間に過ぎる。子供の頃はもつともつと一年が長く、充実したものだつたのに――。なぜ大人になると時間がA過ぎるようになるのか。誰もが感じる

この疑問は、ずっと古くからあるはずなのに、なかなか納得できる説明が見当たらない。この難問について生物学的に考察してみよう。

三歳の子供にとって、一年はこれまで生きてきた全人生の三分の一であるのに対し、三〇歳の大人にとっては三〇分の一だから――。

こんな言い方がある。よく聞く説明だが、はっきり言って、これは答えになっていない。確かに自分の年齢を分母にして一年を考えると、歳をとるにつれて一年の重みは相対的に小さくなる。しかし、だからと言って一年という時間が短く感じられる理由にはならない。

ここで重要なポイントは、私たちが時間の経過を「感じる」、そのメカニズムである。物理的な時間としての一年は、三歳のときも三〇歳のときも同じ長さである。にもかかわらず、私たちは三〇歳のときの一年のほうをずっと「B」と感じる。

そもそも私たちは時間の経過をどのように把握するのだろうか。自分がこれまで生きてきた時間をモノサシにして（あるいは分母にして）時間を計っているのだろうか。もしそうなら先の説明も一理あることになる。

でも、これは違う。私たちは自分の生きてきた時間、つまり年齢を、実感として把握してはいない。大多数の人は自分が「まだまだ若い」と思っているはずだし、一〇年前の出来事と二〇年前の出来事の「古さ」を区別することもできない。

一年があつという間に過ぎる。時間経過の謎は、実は私たちの内部にある、この時間感覚のあいまいさと関連している、というのが私の仮説である。それはこういうことである。

今、私が完全に外界から隔離された部屋で生活するとしよう。この部屋には窓がなく、日の出の入り、昼夜の区別がつかず、また時計もない。

この中で、どのようにして私は時間の感覚を得ることが出来るだろうか。それはひとえに自分の「体内時計」に頼るしかない。だいたいこれ

くらいで一日二四時間。七回眠ったからおおよそ一週間が経っただろう。もうそろそろ一カ月が経過した頃かな。そして……とうとう一年。

もちろん、このような生活が、たとえ衣食が足りたとしても、まとも続けられるとは思えないが、これはあくまで思考実験である。

私が三歳のとき、この実験を行って自分の「時間感覚」で「一年」が経過したとしよう。そして私が三〇歳のとき、もう一度この実験を行って「一年」を過ごしたとする。いずれも自分の体内時計が一年を感じた時点が「一年」ということである。それぞれの実験では、実際の物理的な経過時間を外界で計測しておくとする。

さて、ここが大事なポイントである。三歳のときに行った実験の「一年」と三〇歳のときに行った実験の「一年」では、どちらが実際の時間としては長いものになっただろうか。

意外に思われるかもしれないが、ほぼ間違いなく、三〇歳のときに感じる「一年」のほうが長いはずなのだ。なぜか。

それは私たちの「体内時計」の仕組みに起因する。生物の体内時計の正確な分子メカニズムは未だ完全には解明されていない。しかし、細胞分裂のタイミングや分化プログラムなどの時間経過は、すべてタンパク質の分解と合成のサイクルによってコントロールされていることがわかっている。つまりタンパク質の新陳代謝速度が、体内時計の秒針なのである。

そしてもう一つの厳然たる事実、私たちの新陳代謝速度が年齢とともに確実に遅くなるということである。つまり体内時計は徐々にゆっくりと回ることになる。

しかし、私たちはずっと同じように生き続けている。そして私たちの内発的な感覚は極めて主観的なものであるために、自己の体内時計の運針が徐々に遅くなっていることに気がつかない。

だから、完全に外界から遮断されて自己の体内時計だけに頼って「一年」を計ったとすれば、三歳の時計よりも、三〇歳の時計のほうがゆっ

くりとしか回らず、その結果「もうそろそろ一年が経ったなあ」と思えるに足るほど時計が回転するのは、より長い物理的時間がかかることになる。つまり三〇歳の体内時計がカウントする一年のほうが長いことになる。

さて、ここから先がさらに重要なポイントである。タンパク質の代謝回転が遅くなり、その結果、一年の感じ方は徐々に長くなっていく。にもかかわらず、実際の物理的な時間はいつでも同じスピードで過ぎていく。

だから？ だからこそ、自分ではまだ一年なんて経っているとは全然思えない、自分としては半年くらいが経過したかなーと思った、そのときは、すでにもう実際の一年が過ぎ去ってしまっているのだ。そして私たちは愕然※がくぜんとすることになる。

つまり、歳をとると一年が早く過ぎるのは「母母が大きくなるから」ではない。実際の時間の経過に、自分の生命の回転速度がついていけない。^⑦そういうことなのである。

(福岡伸一『新版 動的平衡』より。出題の都合により一部文章を省略した箇所がある。)

(注) 想起⇨過去の体験や出来事を思い起こすこと

ビビッド⇨生き生きとしているさま

流転⇨やむことなく移り変わり続けること

これまで見てきた⇨引用の前の部分で筆者は、脳細胞を構成する内部の分子は次々に分解されて新しい分子と入れ替わっているため「記憶物質」は存在しやうがないことを説明している

連繋⇨つながり

活動電位⇨生物の細胞や組織が刺激を受けて興奮した時に発生するエネルギー

メカニズム⇨物事の仕組み 愕然とする⇨ひじょうに驚く

(一) 一〇年前のことが五年前のことよりも、より遠い昔のことだという実感を持つことはできない とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア より印象の強い出来事ほど自分にとって重要な意味をもつものとして記憶されるので、実際にどれほど昔の出来事かということは意識されなくなるから。

イ 記憶とは、人が過去の出来事を思い出すたびに脳内に作り出されるものであり、過去から現在へと時の古い順に並べて保持されているものではないから。

ウ 人が記憶を時間の順に正しく並べるためには日記や写真など何らかの手が必要だが、手がかりが与えられなければ記憶の新旧も定まらないから。

エ 若い頃の記憶は、時間の古いものから新しいものへと順に保持されているが、年齢を重ねるにつれ、時間経過を正しく把握することができなくなるから。

(二) 鮮烈②の「鮮」と同じ意味で使われているものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 生鮮 イ 鮮度 ウ 鮮明 エ 新鮮

(三) ような③と同じ働きをしているものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 弟は蚊の鳴くような声で祖母に謝った。

イ 彼女のような努力家は見たことがない。

ウ その話はどこかで聞いたような気がする。

エ あのような失敗は二度としたくない。

(ハ) ^⑦ ということなのである とあるが、「ということ」の具体的な内容として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 三〇歳の体内時計がカウントする一年は、三歳の体内時計がカウントする一年よりも長くなるが、実際の時間の経過は変わらないので、結果的に自分の感覚よりも早く一年が過ぎてしまったように感じるということ。

イ 子供の頃の一年よりも、大人になってからの一年のほうが短く感じられるのは、加齢とともに体内時計の回り方が遅くなる結果、一年が経ったと感じるのに要する物理的時間が短くなっていくからだということ。

ウ 体内の新陳代謝の速度が低下するにつれて一年の感じ方は徐々に長くなっていくが、外界での時間は常に同じスピードで進むので、実際にはまだ一年に満たないのに、既に一年が過ぎたように感じるということ。

エ 歳をとって体内時計のスピードが低下するにつれ、内発的な時間感覚と外界の実際の時間とのずれが大きくなり、子供の頃に感じた一年という長さが、三〇歳では倍ほどにも感じられるようになったということ。

次の文章は、鎌倉時代の仏教説話集『沙石集』の一部である。これを読み、各問いに答えよ。

奈良の都に八重桜と聞こゆるは、当時も東円堂の前に有り。そのかみ、時の后、上東門院、興福寺の別当に仰せて、かの桜を召されければ、掘りて車に載せて参らせける。

ある大衆の中に見合ひて、事の子細を問へば、「しかじか」と答へけるを、「名を得たる桜を、左右なく参らせらるる別当、返す返す不当なり。

僻事なり。且つは色もなし。后の仰せなればとて、是程の名木を争か進すべし。とどめよ」とて、やがて貝を吹き、大衆を催して打ち留め、「別

当をも払ふべし」などまでののしりて、「この事によりて、いかなる重科にも行はるれば、我が身張本に出づべし」とぞ云ひける。

この事、女院(彰子)聞こしめし給ひて、「奈良法師は心なき者と思ひたれば、

わりなき大衆の心かな。実に色深し」とて、「さらば、我が桜と名付けん」とて、伊賀国与野と云ふ庄を寄せて、花の盛りの七日、宿直を置きて是を守らせる。今にかの庄、寺領たり。昔もかかるやさしき事ありけるにこそ。

(注) そのかみ昔 上東門院一条天皇の後であった彰子

別当寺務全般をつかさどる僧

(一) 仰せて と主語が同じものを、文章中の「ア」から一つ選び、その記号をマークせよ。

(二) 返す返す不当なり とあるが、「不当」だと言うのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 名高い奈良の八重桜を見たいと望んだ上東門院を、別当が勝手に車に乗せて興福寺へお連れしたから。

イ 奈良で評判の八重桜を、上東門院が所望したとはいえ、別当が深く考えもせず献上しようとしたから。

ウ 有名な八重桜を見に興福寺を訪れた上東門院に対し、別当が特別の敬意も払わずに応対していたから。

エ 奈良の八重桜について、別当が、さも自分が手厚く世話をしているかのように上東門院に話したから。

(三) 我が身張本に出づべし とあるが、これはどういうことを意味しているか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア たとえ別当が重罪に問われなくても、自分は、誤ったことをした張本人として別当を非難するということ。

イ 張本人の別当は言うまでもないが、別当の行動を止められなかった自分もまた重罪に値するということ。

ウ どれほどの重罪になろうとも、別当ではなく自分が張本人として名乗り出る覚悟をしているということ。

エ 寺で騒ぎを起こしたことを非難されたら、そもそも張本人は別当であると主張するつもりだということ。

(四) ④ 実に色深し とあるが、これはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 奈良の寺の僧たちは深く情趣を解するものだということ。

イ 興福寺の桜の花の色はひときわ濃くて美しいということ。

ウ 上東門院はきわめて優しい心をお持ちの方だということ。

エ 奈良の寺の別当の情け深い行為が身にしみること。

(五) この文章の内容にあてはまるものとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号をマークせよ。

ア 後に名木をひと目でも見ていたかどうかと苦心した僧と、その僧の心に感動してほうびを与えた後の行いを挙げ、昔は心の美しい人が多くいたと懐かしんでいる。

イ 名木をひそかに後に献上しようとする企てを途中で妨げた僧と、その僧の罪をとがめた後の行いを挙げ、昔も今も人の争いは絶えないものだと世を憂えている。

ウ 思慮もなく名木を後に献上しようとした行為を止めた僧と、その僧の行動をほめたたえた後の行いを挙げ、昔も風雅な出来事があったのだと感銘を受けている。

エ 気に入った木を献上せよという後の命令に逆らって奈良の名木を守った僧と、その僧の行動に立腹した後の行いを挙げ、理不尽な要求が通る世の中を嘆いている。

次の文章は、中学生の春子さんが「日本の食品ロス」というテーマを立てて調べたことを発表するために書いた原稿の一部である。この中に、調べた結果を正確に伝えるという点から見ると、余分な内容が含まれている。冒頭の文に続いて、締めくくりの文まで、前から順に一文ずつア、イ、ロの記号が付されているので、省いた方がよいと思われる文を三つ選び、その文の記号をマークせよ。

食品ロスとは、本来食べられるにもかかわらず廃棄される食品のことです。

ア 農林水産省より公表された最新の資料によると、日本の二〇一九年度の食品ロスは五七〇万トンでした。

イ 二〇一五年度の六四六万トンに比べれば少し減っていますが、いまだに大きな社会問題の一つであるといえます。

ウ 国民一人あたりの量を考えると、一年間におよそ四五キログラムの食品ロスを出していることになりました。

エ 自分が一年間でそれほどの量を捨てているという自覚はまったくないので、驚きました。

オ 五七〇万トンの食品ロスのうち、半分弱にあたる二六一万トンは一般家庭から出されたものです。

カ 一般家庭における食品ロスの約四五パーセントを占めるのは、食事を多めに作ったり注文したりした結果、食べきれずに捨ててしまう「食べ残し」です。

キ 食べすぎは健康のために避けるべきですが、食べ残しは非常にもったいない行為といえます。

ク それに次いで約四〇パーセントを占めるのは、「直接廃棄」で、これは買った食品を使わないまま、結局期限が切れてしまったり捨てるといってものです。

ケ 大型スーパーはもちろんのこと、最近では小型店でも、多くの珍しい輸入食品が売られています。

コ そして、残りの約一五パーセントが調理の際に野菜などの皮を厚くむきすぎるなど、食べられる部分を捨てる「過剰除去」と言われるものです。

食品ロスを少なくするために、私たち一人ひとりが、「捨てるすぎない」「作りすぎない」「買いすぎない」という意識をもって食生活を見直すことが大切だと思います。

